

# 近世庶民の学問とは何か

長 友 千代治

- 一、はじめに
- 二、学習・学問の普及
- 三、学習・学問をする理由は何か
- 四、学習・学問の究極の目標は何か
- 五、原則的な教科課程
- 六、庶民の自学自習の教科課程
- 七、教材は出版本屋の製作出版物
- 八、学習成果は

本稿は平成十八年十一月二十八日佛教大学国語国文学会で標題での講演と、翌年一月十七日「重宝記発掘」と題しての最終講義を纏めたものである。国語国文学会までは最終講義はしないうつもりでいたので、かなり意気込んで、あえて設定した題目であった。近世庶民の間には学習・学問に対する情熱や向上の精神が漲っていたこと、教える側にも学ぶ側にも熱誠溢れる真摯な姿のあったこと等を伝えて奮起を促したかったのである。それではどんな態度が好きかとの質問もあり、「初登山手習教訓書」と答えて見ても切ってみた。私は学問が好きだ、とは恥しくて広言できないが、それでも学問を身につけ、深くありたいとも思っている。学会が終って三日後、最終講義は大学行事だと学長に諭され、その時は重宝記について地道に学ぶ庶民の姿を見習いたいと話したのであった。

## 一、はじめに

近世、江戸時代における庶民の学習学問の在り様を探つてみたいというのが本稿の狙いである。

それでは庶民とは何か。庶民とは一般普通の人間をいうのであるが、宝永三年（一七〇六）『初学訓・四』には「国土に四民あり。士農工商也。四民、皆義理を行ふ事は一にして、利養を求ることわざ、各かはれり。義理を行ふとは、即ち人倫（人間）の道を行ふを云ふ。（中略）凡そ、農工商の三民は、君に仕へずして禄なし。自ら利養を求るを専らとす」とある。ここで言うことは、士とは君に仕えて禄を貰い、農工商は自ら利益を得て生活する者、即ちこれが庶民である。それでも人間として、義理を行うことは同じであるというのである。このことは文政十二年（一八二九）『百姓往来』に「夫れ、四民之内、士之外は、農人、諸工人、商人共、皆百姓と云也。（中略）当代は農民而已百姓と称す」とあり、広く百姓という言い方があったが、江戸時代は百姓は普通では農民に限られていた。

江戸時代の士農工商の身分社会にあつては、その職業は世襲させられていた。士は本来は軍務であるが、戦争のない平和な時代が続いたため、幕府でも諸藩でも、役人として公務に従事していた。その士分の基本的な教育は各藩校

にあり、教育理念は幕府が朱子学を文教政策の指導原理として取り入れた儒教思想である。儒教の徳目というのは、五倫すなわち人間の守るべき五つの道、父子間の親、君臣間の義、夫婦間の別、長幼間の序、朋友間の信である。これを教える教科書も各藩から出版されていて、既に笠井助治氏著『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館昭和五十七年初刷）がある。そこには広い意味での官版から藩版の調査に加えて、出版書物の目的について、およそ次のようにまとめられている。

(一)教科書を安価に出版して一般士民に使用させ、学問教養の普及と思想の統一を期した。これは藩校が数多く設立された幕末期に盛んに出版され、巻冊の少ない少部数のものが多かった。

(二)藩主の好学、学芸尊重、趣味情熱により、古書や学者の先著の散逸を憂えて、蒐集校刊したものである。また藩主自らの業績を後世に伝えようとしたものもある。

(三)藩の学識者の著述で、学問教育や民生に価値のあるものがある。

(四)幕府の奨励や内命により出版したものがある。

一般藩士の学校組織は、説かれているように、天明（一七四一〜一八九）頃から幕末に向つてだんだんと整い、この士分の教育普及が教科書の需要を増大させている。その藩

校の教科は漢学（經・史・子・集）を主とし、習字、算学、皇（和）学、医学、洋学、兵学、諸武芸学などであった。

詳細は前掲書につくとして、それではこれに對して庶民の学問はどうだったのだろうか、その概要を窺いたいのである。

## 二、学習・学問の普及

学習や学問は、戦乱の世には創出も発展もなく、平和が必要であるとする慶長十九年（一六一四）『見聞集・四（童子あまねく手習ふ事）』の記事は次のようである。

廿四五年以前迄、諸国におゐて弓矢をとり、治世ならず。是によつて、其時代の人達は手習ふ事たやすからず。故に、物書く人は稀にありて、書かぬ人多かりしに、今は国治まり、天下泰平なれば、高きも卑しきも、皆物を書き給へり。尤も筆道は、是諸学の本といへるなれば、誰か此道を学ばざらん。

二十四五年以前は、天正（一五七三〜九二）の終りであり、これに続くのが文禄（一五九二〜九六）慶長（一五九六〜一六一五）である。その時代、いわゆる文禄・慶長の役があり、慶長五年の関ヶ原の戦を経て徳川家康が江戸幕府を開いたのが慶長八年である。家康は幕藩体制を施き、その後財政困難を來たすことはたびたびあったものの、戦乱は

絶えてなく、平和な世界を現出した。『見聞集・四』に今は国治まり、天下泰平なので、身分の高い者も卑しい者も皆物を書く。筆道は初学の基本と言われて誰もが学ぶとあるが、その前提には「今は国治り、天下泰平」があるのである。ここに身分の高い者も卑しい者もと言うのは、やや誇張した表現であり、当時の社会情勢からすれば士分以上であり、卑しい者といつても上流町人階級であろう。要するに、手習うことが容易にできる世の中になったことを誇張して書いたと思われる。

庶民階級の学習が文字通りに盛んになるには、開府より三代目およそ九十年間を経過しなければならなかった。この間、上方から江戸を中心に商品経済が発達、日常生活には読書算盤よみかきそろばんの知識利用が不可欠となった。俗に文化繚乱の元禄時代というのは、元禄時代（一六八八〜一七〇四）に代表させて、その前後の延宝（一六七三〜八二）頃から正徳（一七一〜一六）頃までを含めていうが、この頃庶民文化の開花をみた。この時期になると庶民子弟の学習状況を描写した作品も少なくなく、貞享五年（一七二〇）『日本永代蔵・一・二』の記事がよく知られている。通行の文章に直して引用してみよう。（以下も大方同じ）

大和、河内、津の国、和泉の物作りする人の子供は、惣領を残して末々を丁稚奉公に遣わし置き、鼻垂れて

手足の土気の落ちないうちは、豆腐、花柚の小買物に使われるが、お仕着を二つ三つと年を重ねるに従い、供囃子、能、船遊びにも召し連れられ、行水に数を書き、砂手習をし、地算も子守の片手に置き習い、いつとなく、角前髪より銀取の袋をかたげて、次第送りの手代分になって、

大坂市中で丁稚奉公する者は、周辺の摂津、河内、和泉の国の二男三男以下の者で、始めは豆腐買いなど使い走りをして、二三年たつと主人のお供で能や船遊びにも連れられ、流水に数字を書いたり、盆に入れた砂に文字を書いたりして覚え、足算・引算も子守の片手間に習い覚え、いつの間にか手代分になって、算用も出来るようになるというのである。いわゆる丁稚教育であるが、その優秀な手代像は宝永四年（一七〇七）『冥途の飛脚』の忠兵衛である。

亀屋の世継忠兵衛は、今年二十四。四年以前に大和から敷銀持つて養子分での奉公、後家妙閑の教えで、商い功者になり、駄荷積りもうまく、江戸へも上下三度出張した。茶の湯、俳諧、碁、双六もでき、延紙に書く字の角も取れて、酒も三、四、五杯は飲め、五つ紋の羽二重羽織も着こなし、無地の丸鍔に象嵌をした脇差もよい物を持ち、田舎出にしては稀に見る出来た男

である。

忠兵衛は養子分で奉公したが、女主人後家妙閑の教育を受けて飛脚商売に熟達した上に茶の湯、俳諧、碁、双六の諸芸能も覚え、書く字も上手になり、酒も嗜み、着こなしもよく、大和の田舎出身の丁稚は洗練された都会人の教養を身につけたのである。この文のすぐ後には、「手代達は帳面を付け、算盤を置く」とある。

一方、丁稚奉公に出ない子供達については、手習師匠と寺子屋の様子が元禄七年（一六九四）『西鶴織留・一・二（品玉とる種の松茸）』に記されている。これは奈良草履屋を二足三文に捨て売りして、女房の在所大坂住吉の南遠里小野に引つ込み、文字の書けるのを幸いに、土地の草刈や牛飼をする全然賤のない子供らに、寺子屋教育をする状況を書いた一節である。

牛の角文字（いろはの「い」の字）より教えていたが、謡を知らないで困って、日毎に大阪へ通って昔の友に習って、また里子に教えていたが、やっと兼平一番を覚えて教えたのに、小原御幸の、源太夫のと、外百番を習いたいと言うので、師匠が知らんとは言い難く、これさえ一日延ばしにして、何なりとも望み次第に謡うて聞かせようと言っている内に、節用集に見えない難字を庄屋殿より度々尋ねられるのに、一度でも答え

たことがないので、何となく首尾悪くなり、初めは麦秋、綿の摘み時、新米の収穫などに初尾（その年最初収穫穀物）をくれたので、商いをしたよりはましと思つていたが、

一人々々寺小屋をやめるのでまた貧しくなつて、朝夕渡世を分別するのに、錢三十文ずつ儲けることは何としても難しかった。

ここでは、生計をたてるために、実力もない師匠が寺子屋を開いたのに、寺子らがさらに次の課程を要求するというのが注目点になる。師匠が謡を教え、節用集を使い、分らないことは昔の友達に尋ねに通うという背後には、庶民のひたすらな知識欲、教育熱が窺えるのである。

開府以来四世代目にもなると、女子供まで手習いする様子が享保十年（一七二五）『昔米万石通・中』に描かれている。突米（つきこめ）（精米）屋をする六十三歳の親が十三歳の娘に次のように語りかける。

父ととが若い時分には、よくよくの分限者（ぶげんしや）でなくては師匠を取つて手習はさせなかつた。一町に物書く者はよくあつて五人か三人、父も手習せなんだ故、いろはのいの字も書くことはできないが、読むことは目の功で間に合す。今は世が上びて、我らごときの娘まで手習いさせ、事欠かぬ。昔は不自由にあつたと思へ。サア、父が頼む、字を書いてくれ、手習する、と言うと、娘

は筆を取りながら、書くことならばどうなりと、私が書いてあげましょう。

この文章からは、享保（一七一六～三六）期以後にもなると、都市部にあつては、親は駄目でも、大方の婦女子まで読み書きが出来るようになっていたことが推測される。

前出『近世藩校に於ける出版書の研究』によると、土分の藩校教育は天明（一七八一～八九）寛政（一七八九～一八〇一）享和（一八〇一～〇四）頃から普及し整備されてきていると説かれているが、庶民の寺子屋開業数もそれに追隨しているようである。寺子屋開業数は、天明時代は一〇一校で前の安永時代（一七七二～八一）の一二・六％の増加。寛政時代は一六五校で同じく一三・八％の増加。天保時代（一八三〇～四四）は一九八四校で前の文政時代（一八一八～三〇）の四一・七％の増加。安政（一八五四～六〇）慶応（一八六五～六七）時代は四二九三校で、弘化（一八四四～四八）嘉永（一八四八～五四）期の三〇六・六％と急速に増加している（吉川弘文館『国史大辞典』による。石川松太郎氏執筆で『日本教育史資料』に収載する寺子屋関係記録による統計とある）。但し、引用の資料のような実情を見る時、実数は決して把握できないであらう。

このような教育熱の中で、実際に子弟の手習入門などを

記録した資料に、名古屋の『貸本書肆大惣江口家内年鑑』がある。肉縁關係に不明な点もあるが、括弧内に推測して記した。

○初次郎（貸本屋大惣二代目長男）享和二年（一八〇二）

正月九歳、伊藤仙助（西尾武吉の親）に手習入門。○きく（同二代目娘）文化七年（一八一〇）七月十三歳、仕立物錆屋太兵衛に頼み入る。酒一升遣わす。○鉄治郎（同二代目二男。貸本屋大惣三代目）文化十年（一八一三）五月十二歳、加藤庄兵衛様に算盤入門。○文治郎（同二代目三男）文化十三年八歳、鵜飼文蔵に手跡入門。酒一升遣わす。

○鉄治郎はこの後、文化十三年十五歳、吉川小右衛門（一溪）に画入門。酒一升、後日持参。同十四年四月、和田愛之助に素読入門、酒一升持参。西尾武吉様に手跡指南。文政二年（一八一九）十八歳、服部甚作に素読入門、酒一升持参。九月には田中倉吉様に柔術入門、野村立伯様に同伴、酒二升持参。文政六年八月二十二歳、貞蔵（鉄治郎十八歳元服後の名）丹羽作二様に素読入門。同八年閏八月、二十四歳、藤間勘吉に三弦入門がたどれる。手習、算盤、画、素読、手跡、柔術など、広い領域にわたる学習がある。

○保太郎（貸本屋大惣三代目の一男）天保十年（一八三

九）十一月十歳、野村門人左中様に素読入門。

○恒治郎（三代目の二男。後の貸本屋大惣四代目）天保十三年二月初午、八歳の時、安井様に手習入門。酒一升持参。保太郎百文持参。同十四年正月、保太郎十四歳、吉川楽平様に素読、算法入門。恒治郎九歳、同断。同日、素読ばかり入門。保太郎、同月二十九日、中川彦八様に謡再入門（始めて入門か）。恒治郎にも同断。

○保太郎弘化元年（一八四四）正月十五歳、山本辰吉様に素読、算盤入門。恒治郎十歳、同断。素読（論語）入門。酒二升持参。とめ四月七歳、お栄様に琴入門、十月、復習に初めて出る。とめ九月、安井様に手習入門、京九ノ酒一升持参。八月、保太郎十六歳、恒治郎十一歳、舟橋正真に素読入門。

○とめ嘉永五年（一八五二）二月十五歳、胡弓を下の町善恵都にて始める。また、安井様に手習入門。こう七月九歳、安井様手習（内）入門。同六年正月二十八日より、こう善恵都に三味線稽古。また、これまで内習の所、二月より安井様に手跡稽古入門。

○貞三郎安政元年（一八五四）正月七歳、安井様に手習入門。貞三郎同二年八月、平田新次郎様に学問入門。大学（家アレバより始め）。

○こう安政三年正月十三歳、善恵都にて胡弓始める。鍵東

は仕立物入門。貞三郎二月九歳、福伝様は謡入門。貞三郎九月、丹羽啓二様は論語入門（二ノ巻）、御同人は手習。○安治、安政六年七月、加藤栄蔵様は算学入門。

引用は三世代を超えるものである。丁稚奉公に出ないで、家庭にいる子供が、男女に限らず、八、九歳を過ぎると手習い学問を始め、諸芸能を身につけていく状況をつぶさにたどることができる。開府以来六世代目以降になると、庶民が学習学問をし、諸芸能も身につける時代になっていることが察知されるのである。

### 三、学習・学問をする理由は何か

それでは、庶民が学習学問をする理由は何なのであろうか。それを知るには寛政十二年（一八〇〇）『童学重宝記』の「初登山手習教訓書」の記事を紹介するのがよいであろう。「初登山」とは、子供が読み書きを習うために始めて寺子屋入りするのを言うのであるが、広く学問を志す者にも通じる心構えとして紹介したのである。元は漢文で振り仮名がついているのを、通行の読み下し文にした。

初登山手習教訓書／右、大体は合戦の出立（いでたち）に異ならず。その故如何となれば、初心の児童登山の時、武士の戦場に向かうが如く、師匠は大将軍の如し。硯・墨・紙等は武具の類なり。卓机は城郭の如し。筆は打物

（武器）の太刀・長刀の如し。

文字、一々書き浮かみ、習い覚ゆる事、譬えば武士一人して、大勢楯籠る城郭に忍び入り、大敵を亡す事、猶以って一大事なり。然りと雖も、名を天下に顕し、他所領を知行して、一身立つのみに非ず、従類・眷族を扶持致す事、弓箭の高名、末代の面目なり。

又手習・学問の少人、手本は必ず敵に向うが如し。打物の筆を以て習い取り、現当の所領、知行すべきなり。これに依つて、文字一々勢力を励まし、才智芸能、人に勝れたる者は、諸人これを尊んで賞玩す。金銀米銭願わずして蔵に満つ。七珍万宝貯えずして、心に任ずるものなり。

もし又、疎学・不用の輩に於ては、その身ばかりの恥辱に非ず、師匠・父母の名を腐すなり。年関け老い来りて後悔千万なり。幼稚の時、師命に随わず、親の仰せを恐れず、未練第一にして寺を逃げ下り、一文一字を学ばざるは、譬えば宝の山に登り、空しく金玉を得ざるが如し。芸能無き故に、毎座赤面至極なり。才智無き故に、所々に於いて、万人の誹謗を受くるものなり。はたまた敵陣に向う武士の臆病第一にして、合戦の場を逃げれば、その恥辱一期の間遁れ難く、雪め難く、自然に家を失い、所領を失い、身の立ち所を無く

して、武具の類を持たざるは、諸人の先途に立ち難きものなり。

然る間、合戦と手習と、ここを以て同事か。故に、初学初心の児童等、先ず此の理を専らにし、万事を拗（なげ）つて手習学文致すべきものなり。抑も文武二道に達する者、天下に名を揚げ、四海に徳を顕し、才智芸能有る故に、上古末代の名人と聞ゆること有るべきものなり。

大略、此の趣を以て心の有る少人は、諸道芸能を嗜むべきものなり。伋（く）つて教訓書、件（くだん）の如し。

この文章の理解には江戸時代特有の社会・道德・価値観を認識した上で、その趣旨を汲み取らなければならない。

現代の価値判断で、「（学問して）名を天下に顕し、他の所領を知行して、一身立つのみに非ず、從類・眷族を扶持致す事、弓箭（きうせん）の高名、末代の面目なり」等、これに類する文章を時代錯誤も甚だしい等と否定するのではなく、理解すべきことは、「手習・学問の少人、手本は必ず敵に向うが如し。打物の筆を以て習い取り」という、手習・学問の必修精神である。さらには「万事を拗（なげ）つて手習学文致すべきものなり。抑も文武二道に達する者、天下に名を揚げ、四海に徳を顕し、才智芸能有る故に、上古末代の名人と聞ゆること有るべきものなり」という、漲る（みなぎ）る向上の精神であり、

強烈な学問達成意識である。

ここに家中心、立身出世主義、面目を施し、恥を搔かぬ等の道德や価値観が強調されているのは、時代を写したものであり、そのことを弁えさせるための教訓状なのであるが、この学習や学問の必修精神は広く共通する時代の精神であった。

#### 四、学習・学問の究極の目標は何か

庶民にとつての学習・学問とは、それぞれの家職に必要な知識技能、加えて教養としての諸芸能を身につけるものであるが、その学習・学問には常に理念や精神が包含されていた。それは現代にも続く常識的な理念や精神となつていたのであるが、逆に言えばそれは、常識となるほど徹底して確立された理念や精神であった。

寛永十五年（一六三八）『清水物語』は開府より三十年を経過して成立した仮名草子で、次のような記述がある。

文章のよきを好む人は、三史文選を見るべし。道を知らんと願はば、四書五経を学ぶべし。和歌の言葉続きを玩ばむ人は、源氏物語の類を読むべし。引き事の面白きには、昔よりこのかた記し置きたる和歌草紙に、諸子百家の事、仏経など引き合せたる多し。

学文といへば、古き双紙を読むばかり学文と思はれ候



や。其れも学びにてなきとは申されず候へども（中略）、学文と云は、道理と無理とを知り分け、身の行ひを能くせんが為にて候。

ここでは、学文（問）が知識教養を身につけるものであること、それぞれの目的によってその方面の教科書となるべき手本のあることを例示した後、結論として、「学文と云は、道理と無理とを知り分け、身の行ひを能くせんが為にて候」と言うのである。知識教養を学び取ることも学文であるが、究極は身の行い<sup>おこな</sup>をよくするためにするものであると断定するのである。そしてこの趣旨は、現実的・実際的な思想として、啓蒙教化の諸書を貫く精神であり、以後も挙例に事欠かない。

開府より百年、三世代も過ぎると、啓蒙学者たちの活躍は一層盛んになり、学問修身論はさらに具体的に展開される。その代表は貝原益軒（正徳四年（一七一四）、八十五歳没）の各種の啓蒙教訓書に代表される。宝永三年（一七〇六）『初学訓・三』の記事を解説しながら紹介すると、以下のようである。

「学問の道は、善を行ひ悪を去るの旨とする。学んで書物を読んでも、善を好まず行わなければ、何の用もない。我が身の過ちを改め、悪を去って善を行ひ、殊に孝悌（親に真心を以て仕え、兄弟を敬愛すること）を本として、人

倫（人間）を憐れみ、その分に応じて人に施しをして救い、その位に従って人を敬え」とまづ説いて、

「学問の」目当ては、君子（人格の高い人）となることを期するを以て志とせよ。そうでなくて、才学（才智と学問）のみに心を用いると、これだけで自ら誇り、人を侮<sup>あやむ</sup>るため、書物を読まない時より心ざま（性格）はかえって悪くなつて行く」と、学問を人に誇つたり、人を見くびったりすることを戒めた上で、

「学問は古の聖人（知徳の秀れた孔子等）賢人（聖人に次ぐ有徳の人）を師として、五常（儒教で人の守るべき仁・義・礼・智・信をいう）を心に保持し、五倫（親・義・別・序・信）を實踐し、次に天下万物の道理を究め、古今の事に通じて、我が心の知を開く道である。大体諸々の卑しい小芸能でさえない師匠がいる。稽古し努力して学び、長くかかって後、その技芸を習い取るのが道理である。まして学問は我が身を修め、多大の道理を知ることであるので、師匠がなく、学問がなくては、どれほど生れつき才能があつても、どうしてこんなことを一人だけで知ることができようか」と努力の必要性を説いている。学問は身を修めるものであるから、昔の聖人・賢人を師匠として、努力しなければならぬと力説するのである。

さらに宝永五年（一七〇八）『大和俗訓』には、学問に

ついで次のような具体的な記事がある。「学問は筋が多い。訓詁の学がある。記誦の学がある。詞章の学がある。儒者の学がある。訓詁の学とは、聖人の書の文義を詳しく知ること、に努めることをいう。記誦の学とは、広く古今の書を読み、故事事跡を覚えることをいう。詞章の学とは、詩文を作ることをいう。儒者の学とは、天・地・人の道に通じて、身を修め、人を修める道を知ることという。学問をするなら、儒者の学をするといふ」というのである。

さらに以下のような記事が断続して続く。

「学問の法は、知・行の二を肝要とする。この二を努めるのを、致知・力行とする。致知というのは知ることを究めることである。力行とは、行うことを努めることである」。また、次のようにもある。「知・行の二つの工夫を、細かに分つと五つある。中庸にいう。博く学び、審らかに問ひ、慎んで思ひ、明らかに弁え、篤く行う。これは道を知って行う工夫で、学問の法である」。

「書物を読むなら、我が身に受用することを専一にし、志すべきである。受用とは、書物に記してある聖人の教えを、我が身に受け用いて守り行ひ、用に立つるをいう。

もし書物を読み、義理を聞いても、身に受け用いないで行わなければ、何の益もない悪戯いたずらごとである」。このことは、元禄八年（一六九五）『世話重宝記・一』に、「論語読

みの論語読まずという世話（俗言）は、論語を読んで聖人の道を知つても、その身に行うことを知らない者の譬である。身に行うことは言うまでもないことである。論語の素読もとよみも知らずに、聖人の道とはどのようなことさえ弁えぬ者は世の中に多い。これを論語読まずの論語読まずとか言うのであらう」とある。

以上は、学習・学問の究極の目標は、学んだ知識を実行してはじめて学問になるという大原則を説くものである。

## 五、原則的な教科課程

究極の学問とは、聖人賢人の書物について、その説く所を理解して実行することであつた。それでは聖人賢人の書物をどう読んだらよいのか、いわばその教科課程についても大方整えられていた。前出の『大和俗訓・三』には次のようにある。

「初学の人は、書物を読むには、まず四書（大学・中庸・論語・孟子）を熟読し、また五経（易経・詩経・毛詩・書経・尚書・春秋・礼記）をよく読むとよい。五経は上代の聖人の教えである。文字の祖、義理の宗といつて、文字の始め、義理の教えの本である。四書は孔門の教えである。これを読むと、目の前に聖・賢の教えを聞くようである。尊ぶがよい。

文章の意味がどうにか分かるようになったら、四書の註、大学・中庸の或問（問に答える形式で自説を主張する形式の本）を見て、その後で五經の註を見るのがよい。次に周（周・敦頤）、程（程・顥・程・頤）、張（張載）、朱（朱熹）の四家の書物を見るべきである。

半ばに至って、程朱の書物（程朱学の本。上述の程・顥・朱熹の本）を読むべきである。殊に小学の書物は身を修める大法を記している。人倫（人間）の道はほぼ尽されている。早く読んで、その意味を習い、知るのがよい。

また歴代の史、左伝、史記、朱子、通鑑綱目を見るのがよい。これは道を知り、古今に通ずる学問の方法である。

經（四書五經等の儒学書）、伝（經書の注解書）、歴代の史書に通じたら、天下古今のことは明らかにならないということはないであろう。

聖人の書物を經という。經とは常である。聖人の言は万世の常道である。

賢人の書物を伝という。伝とは聖人の道を述べ、後代に伝えることである。四書五經は經である。その注ならびに周・程・張・朱の書は伝である。

歴代の事を記した書物を史という。記録のことである。

子は、荀子、楊子、淮南子、説苑、文中子等の諸子の書物をいう。これは程朱の書物のように道理が精明ではない

が、經書の義理を助ける益がある。見るべきである。集は諸家の文章等の書物である。これもまた義理を説き、明らかにしている。

この經・史・子・集の四つの書物は本末輕重はあつても、みな学問のために用いる書物である。道を知ろうとするならば、經学を専らとして一生努力すべきである。次に史学であるが、これもその益は大きい。次に諸子の諸集を見る」とよい。

長い引用になったが、言うところは初学の人はず四書五經を読んで、その後その注解書を読み、さらに歴史書、諸子の書物、諸家の文章へと読み進めるとよいと説くのである。その究極の目的は義理（意味）を理解して身に付け、実行することである。

この読書法は伝統的正当な読書法として、修正されながらも広く受け継がれている。例えば嘉永三年（一八五〇）写本『読書矩』には次のような記述がある。

入門之学・四書集註、史記、漢書、三国志、莊子など。

上堂之学・論語古註、通鑑綱目、大日本史など。

入室之学・宋史、白樂天集、平家物語、太平記など。

入門は門に入って師につくこと、上堂は堂に上がって受講すること、入室は奥の間に入ることで、学問の奥義に達

することである。それぞれに学問階梯を現わし、その段階での学ぶべき代表的書物が列挙されている。

## 六、庶民の自学自習の教科課程

江戸中期、開府以来五世代目にもなると、識字能力を身につけた庶民対象の自学自習の啓蒙教化書が出現、そこには根本的に異なる全く別な教科課程が提示されている。その教科課程は概観してきたような教科課程とは反対の過程をたどるのであるが、聖人賢人の道を受用するということでは何も変りはない。その代表として明和三年（一七六六）『間合早学問』と安永六年（一七七七）『女早学問』をあげることができる。編著者は両書とも大江玄圃（寛政六年へ一七七九、六十六歳没）である。引用はまた長くなるが、先ず『間合早学問』から紹介してみよう。

「学問大意／それ学問とは、書物を読んで古の聖人の道を学ぶことである。その深奥<sup>おくふかき</sup>精微<sup>ききわ</sup>理を究めることはたやすいことではないが、まるで全く学問のないのは不束<sup>ふつか</sup>（社会性や品格に欠ける）なので、人と生まれては少しは覚えたいものである。誰であつても少し学ぶと万事に都合のよいもので、人柄も言葉も美しく、人に敬われる。それ故孔子は、行いに余力があれば文を学べと言っている。この意味は、士農工商ともに、家業の暇にはひたすら学問せよ、と

教えられた言葉である」。

「学問捷徑（はやみち）／世に学問といえは、広大明なことであつて、今日の凡夫（普通の人）が仮にも窺えるものではないと思つて、少しも立ち寄らないのは、その近道を知らないからであらう。

仮にも学問に志しがあれば、まず仮名書の軍書、あるいは通俗三国志（中国白話小説三国志演義の翻訳）等の類をひたすらによむとよい。通俗物の類を多く読んでいくと文字もよつぽど覚える。

それから蒙求、史記を読むとよい。

蒙求、史記を読み終わつたら、四書五経を読むとよい。このように努力すると、大方読めるものである。

その読み難い所があれば、字引を傍らに置き、ひたすら字引で引いて読むとよい。このようにして怠らずに読むと、いつとなく書物の義理（意味）も明らかに分るものである」。

この『間合早学問』には、読みやすい興味を引く仮名書きの軍書や通俗三国志を読んで、蒙求や史記を経て、四書五経に至るといふ、従来とは全く逆方向の教科課程が示されている。四書五経が究極の対象であることに変わりはないけれども、その読解に必要な文字を覚えるには読みやすい仮名書きの軍書から始めるというのが特色である。これ

は学問入學が素読に始まる寺小屋教育による識字法であつたのに対して、初歩的な識字能力を身につけた庶民が自学自習を前提とする相違と思われるが、新時代に対応した合理的な方法であつた。

『女早学問』にも同じような早道が記されている。

「学問捷徑／古の聖人が正しい道を説かれた書物を読んで、周公・孔子の尊い道を学ぶのを学問というのである。

男子も女子も皆学問すべきなのに、この国の習しではないが、若い男子が学問するのは稀である。

女子はなおその上に学問しない者のように心得て、唐土（中国）の正しい本を読まず、あの物語・草紙などの戯れた本を多く読み、それ以下の者は年々作り出される浄瑠璃・歌舞伎などという物を好んで、もったいなく月日を送るのは浅ましいことである。物語・草紙・浄瑠璃・小歌の類は幼い女の玩ぶものではない。」

女子の究極の学問も同じで、周公・孔子の尊い道を学ぶことを学問というのであり、女子が好んで読んだとされる物語・草紙・浄瑠璃・小歌の類を認めず、学問と慰みの読書を区別して、慰みの読書を否定しているのである。

これらのことは安永十年（一七八一）『文章指南調法記・四』でも同じで、いわゆる仮名書の初歩的入門書的な書物から始めて、究極の四書五經に至るといふものである。

「入学文章／幼き女の読むべき書物は和論語、女四書、女大学、大和小学、翁草をよしとする。これらの書物を読み覚えて、後には四書五經、孝教、烈女なども読んで、古の賢女の正しい行いを学ぶべきである」とあり、続けて四書五經の内容をそれぞれ次のような簡潔な評語で、人間の道を記す書物として解説している。

大学 身を修めるの一句につきる

論語 二十篇ともに仁の一字につきる

中庸 心術の大事をのべている

小学 孝悌忠信の外なし

易 天地鬼神の妙をかたる

書經 古聖人の徳行をかたる

礼記 威儀進退（たちいふるまい）をのべる

春秋 亂臣賊子をいしましめる

孟子 七篇ながら仁義の二字をいひつくす

近思錄 知行の二つをよき字にいひつくす

詩經 國々の治亂をかたる

右の書籍はあながち一章毎の穿鑿には及ばない。一言一句の肝要を体認（とどめて）なさるならば、一生の受用、不足はないと承つています」とある。

開府以来五世代目以降にもなると、以上のように識字能力を身につけた庶民の自学自習はますます盛んになつて、教科課程も庶民の読みやすい興味ある書物から読み始め、四書五經にたどりつくように組み立てられている。

## 七、教材は出版本屋の製作出版物

啓蒙教化に努める儒学者たちは、庶民に学習学問の大切さを教え、究極は人間の修身として説き、そのための具体的な教化課程を持っていた。一方、庶民が識字能力を身に

つけ、さらに知識や学問を増進させるには、そのための教科書が必要であるが、その教科書製作を担当したのが出版本屋である。出版本屋は不特定多数の不確実な読者を目当てに、諸状況を判断しながら企画・編輯・出版するのであるが、世代を重ねて読書能力を身につけていく新しい庶民読者を掘り起し標的にするのが、誕生以来の方向である。したがって出版分野を日常実用の読書算盤よみかきそろばんの自学自習書、各種の入門案内書、あるいは娯楽書とするのは必然であった。そこには、例えば重宝記の類の出版があった。

重宝記の流行については、拙著『重宝記の鯛方記』（平成十七年、臨川書店）に約四百点を調査して年表を作成し解説をしているが、重宝記の代表的編著者苗村丈伯の元禄六年『男重宝記・序』には、出版目的や事情を次のように記している。

書林某（大和屋勘七良）が来て歎美して言うには、先に作った女重宝記五冊は世の重宝として梓に鏤め（出版）、摺写して休む暇もない。願わくはこれ（女重宝記）に対して男重宝記を作れという。現在、重宝記と題する書物は十有余種ある。今その汁をすすって先人の糟粕を舐めるのもみつともないので、先書にないことなどを、自分が若年の頃から聞き覚えたままに書き集め、童男が知って重宝とするものである。大人男子

のためにするのではない。

この苗村丈伯の『男重宝記・序』に記すことを検証すると、記述は大体確認される。編著述者の苗村丈伯は生没年未詳であるが、その活動から元禄七年以降の没と推測されている。はじめ彦根藩の儒医であったが、故あって致仕した後、元禄期（一六八八―一七〇四）前半には京都で実用書、俗解書の編著述を盛んにしている。それは仮名草子寛文七年（一六六七）『理屈物語』のほか、元禄七年『年中重宝記』『武家重宝記』など二十数編もの著述がある（市古夏生氏『理屈物語』の作者考、『国文白百合』昭和三十年三月）。

まず、元禄六年『男重宝記』までの重宝記の調査をする、ほぼ記述通りである。もともとも古い重宝記は管見では寛文十年（一六七〇）正月「於大坂開板」とある利息計算表を主な内容とする（寛文重宝記）で、現在確認される大坂最初の出版物となる。天和元年（一六八一）には『男女日用重宝記』再板があり、元禄十五年『元禄大平記・一・一』に『家内重宝記』が出来初めてよりこのかたその類棟に満ち牛に汗するほどであると記されている『家内重宝記』は元禄二年の板行であるが、森田庄太郎板と浅野弥兵衛板がある。元禄三年には『昼夜重宝記』が三都板で出、同四年には『（不断）重宝記大全』、同五年には『万民調宝記』

が出ている。これらは日用の百科全書であり、あるいは教養の自習書でもある。一方では特定部門、例えば元禄五年『医道日用重宝記』、『諸買物調方記』、『噺子謡重宝記』、同年頃『好色重宝記』、未確認の『絵本重宝記』、『妙薬重宝記』（共に元禄五年板『書籍目録』所載）などがある。この内『医道日用重宝記』の後板は、宝永七年（二七一〇）、享保三年（二七一八）、同八年、同十八年、延享四年（一七四七）、宝暦十二年（一七六二）、安永九年（一七七六）、文政元年（一八一八）、弘化二年（一八四五）、嘉永二年（一八四九）、明治三年（未確認）、明治六年（一八七三）、同八年板の都合十四板のほか、無刊記板もあり、明治まで続いている。

中村平五三近子（寛保元年へ一七四一、七十一歳没）も出版本屋お抱えの編著述者である。活動の中心は享保期（二七一六く三六）で、それは開府より四世代目頃の活躍である。はじめ山崎闇斎学を学び、宝永（一七〇四く一一）年間に二年ほど尾張藩に仕えたほかは、京都で多くの啓蒙教訓書の編著述をしている。元禄八年板の有名な『書札調法記』は京都の小佐治半右衛門板で、元文五年（一七四〇）には磯崎宇右衛門ら九軒板の別板があり、明和四年（二七六七）には元禄板の後板が中川茂兵衛ら七軒板で出ている。また無刊記板で、各冊「享保七年寅二月吉日／塩

埜」等の識語のある本は第一く三巻を『書札調法記』、第四く六巻を『書状調法記』と外題を摺り分け、編成内容と対応させた本である。この本は、凡例題、柱題、尾題を入木して、「手本」重宝記」と改められている本の系統である。三近子にはほかにも享保十六年『筆海調法俗字指南車』、『六論衍義小意』等があり、『文章指南調法記・四』には前出のような「入学文章」がある。

開府より五世代目頃、主として享保後期から元文（一七三六く四一）寛保（一七四一く四四）期に活躍したのは自著の編著述を自分の本屋文熙堂から出版した寺田与右衛門である。生没年は不明であるが、二十数点の編著述はすべて啓蒙教化の本ばかりで、例えば享保五年『新編女文翰重宝記』、享保十七年『懷玉筆海重宝記』、元文五年『文宝節用字林集』などがある（前出拙著『重宝記の調方記』参照）。

大坂の吉文字屋市兵衛は、寛永二年（一六二五）から明治六年（一八七三）まで営業した本屋として有名である。その三代目鳥飼洞斎、号酔雅は寛政五年（一七九三）に七十三歳で没している。活躍は開府以来六世代目、本屋主導で啓蒙教化書が企画出版され、あるいは自分の著述を自分の本屋から出版する者も多くなる頃の活躍である。鳥飼洞斎には明和二年（一七六五）『女学則』、明和四年『四体千

字文国字引』『女教訓古今集』、また『急用間合即座引』は安永七年（一七七八）、天明七年（一七八七）、文化元年（一八〇四）などの板があり、およそ六十数編ほどの編刊がある。

以上、わずかの挙例でしかないが、出版本屋が庶民読者を対象に啓蒙教化の書を続々板行している事実を指摘したのである。裏返せば、それは世代間に受け継がれ培われてきた庶民の学習熱、向上心に当て込んだものである。それは出版本屋の目に見えない不特定多数の庶民読者の教育である。出版本屋のこの種の本の企画・製作・出版には商業性があり、一方では時代精神をよく反映している。

それでは出版物の内容はどうか。庶民初学者を相手に四書を自学自習できるように工夫した叢書に『經典余師』があり、これは本文を中段に記し、このほかは全て漢字振仮名付き平仮名文で解釈し、上段には読み下しを置いた学習本として、鈴木俊幸氏著『江戸の読書熱自学する読者と書籍流通』（平凡社 平成七年）に広い調査にもとづく卓抜した解説がある。『經典余師』（四書の部）は天明六年（一七八六）から明治四年（一八七一）まで六板の調査があるが、嘉永五年（一八五二）板の「凡例付言」から引用してみよう。

「○第一義／聖人の道とは、天下国家を治むるよりし

て、一己の身の行状を修めるの道なり。人々日用の教にして、貴賤老幼のまなばでかなはざるものなり」

「読法よみかたなり／（中略）誠に聖人の教人々ならぶ（ふ）べきことなり。男子はもちろん女子といへども、

位ある方は朝夕左右にあるべし。世に大和小学、女大学など、人の道をやはらげて重宝の書もあれど、聖人の詞づかひならぬゆへに益なし。その訳は、右様のたぐひの書は手にとればよめやすく、手をはなればたちまちわすれやすいなり。今この余師の法は学者の読書のごとく、とくと胸中にその語をしたゝめて聖人の詞づかひをよみ覚ゆるがゆへに、仁義の道心にそみわたるなりとこゝろうべし」

学問が聖人の書を直接読んで身を修めるものとする考えは基本的に変わらないのであるが、その聖人の書（四書）の読法を平仮名にして、庶民初学者の自学自習書として提供したのが著者溪世尊と出版本屋の新時代への対応である。次には『童子寺子調法記』と『童女寺子調法記』を例示してみたい。

『童子寺子調法記』は明和元年（一七六四）に小本型で出て、安永五年（一七七六）板から半紙本型になり、文化五年（一八〇八）板、文政七年（一八二四）板、天保三年（一八三二）板、弘化三年（一八四六）板、元治二年（一



八六五) 板等がある。内容は「実語教」「童子教」「今川」

「腰越状」「商売往来」を主本文にして、上欄に「小謡」

「以呂波三体」「万字尽」「九九之段」「十干/十二支」「五

性相性」等十八項目を解説している。「実語教」は主とし

て、經書中の五言五十六句を抄出して、格言風に口誦しや

すく整理したもので、平安中期頃には成立し流布していた

が、江戸時代になると、単独でか、あるいは「童子調

法記」に見るように、他と併せて板行されている。それは

男子を対象に漢字文で書かれ、訓読の平仮名がついている。

山高 故不<sub>レ</sub>貴

人肥 故不<sub>レ</sub>貴

富是一生 財

智是万代 財

玉不<sub>レ</sub>磨 無<sub>レ</sub>光

人不<sub>レ</sub>学 無<sub>レ</sub>智

これによって漢字学習をしながら勸学、教戒、修身等、

人間の基本的生き方を身につけていくのである。

これに対して、『童女寺子調法記』は半紙本型が文化三

年に出て、後板に天保十三年板、刊年不明板があり、小本

型に天保三年板、天保十年板が出ている。半紙本の内容は、

「女実語教」「女今川」「女手習教訓状」「女商売往

来」を主本文にして、上欄に「女身持鑑」「女中言葉づか

ひ」「小笠原折方の図」「大日本国尽」「男女相性の事」

「縫物秘伝」「四季の文」「女兒教訓歌」「諸道具字尽」「衣

類の字」「草木字尽」等二十八項目についての解説がある。

小本型の内容は「女実語教」「女今川」の本文に、上欄

には半紙本からの抜抄した項目がある。

「女実語教」は、「実語教」になぞらえて女を戒める

条々であるが、こちらは漢字仮名書きで漢字には振り仮名

がついている。小本型から引用する。

一品勝れたるが故に貴からず

心たゞしきを以て貴しとす

一容姝しきが故に貴からず

才あるをもつてよしとす

一富はこれ生るうちのたから

身まかるときは別退く

一智恵はこれ万代のたから

命終るときは魂にしたがふ

一心をつゝしまざれば義なし

義なきは畜類にひとし

一勤まなばざれば才なし

才なきは草木にひとし

小本型の口絵にも次のような説明がついている。

「いとけなきときは、手ならひものよみをすべし。此

(二) (座) ふたつうときは一しやうはじ多かるべし」「ぬひばり  
は女子だいのたしなみなれば、かまへてかまへてゆ  
るかせになおもひそ。又ものたちをも心得べし」「女  
はなにごとにしとやかにさはがしからぬがよし。た  
とへたはふれあそびごとにもがさつなるべからず」  
「ことさみせんも女のたしなみなれば少しは心かくべ  
し」。

女の生き方を図絵にして教えたものである。

ついでに天保十四年『童子早学問』について言えば、こ  
れも全くの教訓集である。「読書は能道の案内者／よみ書  
を精出す者は教なくとも知るゆへ案内とはいふなり」、あ  
るいは「手習は通用之眼の療治／手ならひせぬものは盲も  
おなじ事なり。習へばこそ文字がわかるゆゑ、用もたりて  
目のあきたるごとくなり」。『童子早学問』は日常の暮らし  
のなかの身近な教訓である。

## 八、学習の成果は

学習が効果的であり、成果がどれほど上がつていたかを  
検証し、評価するなどのことはとてもむづかしいことであ  
る。これについても二、三の資料の列挙しかできないが、  
学問・教養を身に付けることの重要さは十分に理解されて  
いる。拙文では引用することがたびたびであるが、雑俳に

は次のように読まれている。

読み冥闇ふ書に御徳の窓明きて (元禄八『昼磔』)

理の道の案内に先ッ書の素読 (元禄十四『誹諧広原  
海』22)

海』22)

書の部分ケ理に着く迄の一里塚 (元禄十一『誹諧広原  
海』14)

海』14)

書を読めば親のなき身も理は意見 (元禄十四『誹諧広  
原海』17)

原海』17)

理の道を文字に問はるる我が読書 (元禄十四『誹諧広  
原海』20)

原海』20)

学問や読書の本質は一応は認識されていると見てよいで  
あらう。少なくとも、理解はあつて、広く行きわたってい  
たと考えられる。

天和二年(一六八二)『好色一代男・五・一(後は様つ  
けて呼)』には洗練された教養を身に付けている太夫吉野  
の話がある。小刀鍛冶駿河守金綱の弟子が太夫吉野を見染  
めて恋心を燃やし、夜なべして揚代五十三匁を貯めたが、  
身分が低く会われぬのを嘆いているのを聞いて哀れに思い、  
こっそり呼び入れて初心な男を励まし、どうやらこうやら  
埒明けさせて、盃までして帰した。揚屋は咎めたが、世之  
助は「それこそ女郎の本意なれ」と言つて身請けした。こ  
れを一門中からは道ならぬこととして絶交してきたので、

吉野は回復策を考える。それは、離縁して帰る挨拶に一門の女中方を招待して応接、思いを見事に遂げるのである。

吉野は浅黄の布子に赤前垂をかけ、置手拭をして、片木に切熨斗を盛って取り肴にし、中でもお年寄方へ手をついて、「私は三筋町に住んでいた吉野と申す遊女です。こんなお座敷に出るのは勿体なくございますが、今日御隙をいただきまして里へ帰る名残です」と言つて、

昔の生活を今にして一節うたうと、皆魂も消え入るほどであった。琴を弾き、歌を詠み、茶はしおらしく点て、花を活け替え、時計を仕掛け直し（分銅の調節）、娘達の髪を撫でつけ、碁の相手になり、笙を吹き、無常話（信心話）から内証（家計）の事まで、何かにつけて人様の気を引きつけた。台所に入ると呼出され、吉野一人のもてなしに、皆は座を立て帰る時を忘れた。

世之介の粹な決断とともに、吉野の身につけた豊かな学問・教養・気品・人格が評価され、もと遊女という身分を超えて、切り札になり、うまく治ったという話である。

宝永四年（一七〇七）『堀川波鼓・中』には、姉妹らの生き方が問題にされている。

（母様の）遺言のお詞をよもや忘れはなさるまい。そ

ちら二人は小さい時から女子の道を教え込み、読み書き、縫物、糸綿の道もそれでは恥を掻かぬが、第一女子の嗜みは殿御（夫）持つてからが大事じゃぞ。舅は親ぞ、小舅は兄よ、姉よと思つて、孝を尽くせ。他の男と差し向かいでは、顔も上げて見ぬものじゃ。大体、夫の留守中は、男とあれば召使でも、一門他人一様に、年寄も若い者も隔てなく、この女子の嗜みが悪いと、四書五経を宙で読む女子でも役に立たぬぞよ。此の遺言を、そち達が論語と思つて忘れるな、との御詞が骨にしみ、肝に残つてよう忘れられぬ。

これは女の貞節の重要さを説いて、四書五経に言及したものであるが、四書五経の精神は順守されなければならないことを力説しているのである。

江戸時代には学問向上の精神が漲っており、学び取つて身につけた知識が日常生活に生かされなければならないことは略述した挙例からも明らかである。このことを逆に言えば、それは絵入書、注解書、戯作書等板行書の流布からも推測できる。

黄表紙の天明八年（一七八八）朋誠堂喜三二作『文武二道万石通』は、寛政改革の文武奨励策をうがち、茶化した作品である。同じく寛政元年（一七八九）山東京伝作『孔子縞于時藍染』は、寛政改革の儒教奨励、儉約令など

に題材を得て、庶民に至るまで世道人心が改まったとうが  
ち、茶化した作品である。聖賢の教えがあまねく行き渡り、  
物貫ものぬきや非人まで漢籍を学び、町人は金銀を無理に人に施  
し、女郎は客に金を押し付け、息子は座頭に金をやり捨て、  
あるいは女郎買いで大金を背負い込んで勘当を受けようと  
願う、等々。学問教育の結果、孔子の教えが時世に逢って  
（当時、藍染の格子縞へこうまの流行をかける）、礼節の  
順守、物欲の抑制、金銀の蔑視などが描かれていて、実際  
は現実の庶民生活がすべて逆に、裏返して描かれている。  
黄表紙には類書も多く、社会をうまく写し取っているの  
ある。

さらにはまた巾広い読者のいる春本も出ている。『論語』  
には笑本『論御』、『大学』には『女大楽宝』、『実語教』に  
は『実娛教絵抄』等色々の類似題名がある。

近世の価値・評価基準は四書五經の儒教精神を体用する  
という一事につぎるものの、ここでは屈折するまでにひた  
すらな学問向上心が庶民の間に漲っていることを確認して  
おくこととする。